

信者の祈り (ルカ 11:1-13)

今日、ある弟子たちがイエス様に祈りを教えてくださいとお願いしました。それで有名な主の祈りをイエス様が教えられる場面です。信者にとって祈りというのは、何より大切な武器であり、また信仰生活の一番大切な項目でもあります。皆さんひとりひとりがキリストの御名によって祈る幸せを確認して、ぜひ祈りの答えの主人公になることをまず祈りたいと思います。祈りという言葉聞いたときに、まず何をイメージして、どのようなイメージが浮かび上がるのでしょうか。言葉を変えますと、クリスチャンの祈りは宗教の祈りと何が違うのでしょうか。私たちはクリスチャンなのに、祈りと聞いたとき、今までどこかで見てきた祈りというものが思い浮かぶかもしれません。それは聖書が教えている祈りとは違います。今日、弟子たちはそのようなイメージを持って祈りを教えてくださいとお願いしました。バプテスマのヨハネが教えているようにという前提があったので、あなたがたはそのような祈りはいらないし、してはいけませんという意味で主の祈りを教えられたわけです。なので、祈りと言われたときのいろいろなイメージが全部払拭されることをまずお祈りしたいなと思います。クリスチャンの答えられる祈りのためには、どのように祈るべきなのかという祈りの方法以前に、祈りの内容を修正していかないとはいけません。それが主の祈りを教えられた主な目的でもあります。どのようにクリスチャンは祈りの内容を修正して祈るべきでしょうか。何を祈るべきでしょうか。それが主の祈りの教えの内容です。

1. 信者の自分は誰なのかを改める。

そのためにまず第一に、信者、自分がどんな存在なのか、誰なのかを改めないといけません。今まで自分が思っていた自分とキリストを信じる信者としての自分は全く違うわけです。なのにイエス様を信じると告白しながらも、今までイメージして思っていた自分からなかなか抜け出していない、その殻を破っていないクリスチャンがなんと多いのでしょうか。となると、いくら祈りをささげるとしても祈りの内容は修正されません。だから、祈りは長続きしないし、宗教の祈りと何の変りもない祈り続けるようになってしまいます。なので、まず信者の自分はどんな存在なのか、聖書を通して改めてそれを心に刻印する作業からスタートしないといけません。

1) II コリント 5:17

聖書を見ますと、II コリント 5:17、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなった。これは創造の働きに使われる表現です。キリスト・イエスを信じることによって、自分で感じるか感じないか、外見、うわべがどう変わってるか関係なく、古いもの、神様を離れて死ぬしかない滅びの運命を抱えて悪魔の奴隷だった古い私というものは過ぎ去り、すべてが新しくなりました。これが私なのです。これがクリスチャンなのです。昔のクリスチャンでも今現在のクリスチャンでもどこの国のクリスチャンでも、金持ちのクリスチャンなのか貧乏なクリスチャンのかなどと一切関係なく、クリスチャンであれば古いものは過ぎ去り、すべて新しく創造された幸いな神の作品であることをまず覚えて感謝しないといけません。どのように新しく造り変えられたのでしょうか。

2) ローマ 8:2

ローマ 8:2、死と罪の原理に囚われて地獄に行くしかない運命に縛られていた私たちが、そこから完全に解放されて新しくなりました。それだけではありません。

3) I コリント 3:16

I コリント 3:16、あなたがたは聖霊が宿っている神の神殿であることがわかっていないのか。神様ご自身が、キリストが信者の内側にいのちとして宿られることになりました。それで神の神殿と呼ばれるものに造り変えられたわけです。なんと素晴らしい救いのみわざなのでしょう。

4) エペソ 1:3

だから当然、三位一体の神様が内側に宿って、神様ご自身がいのちとなっている幸いな者に造り変えられ

ています。なので、パウロが刑務所の中で告白し賛美していたように、天にある霊的すべての祝福が、つまり御座の祝福が信者のものなのです。それがすでに私のものであり、これから注がれ続けるようになります。それが私であり、信者という身分なのです。

5) ピリピ 3:20

なので当然なこと、いつ死んでも天の御国の国籍を与えられて、天国に迎え入れられるように保障されている身分であることを忘れてはいけません。まだ終わりに行ってないのに終わりがもう決まってる存在です。何も心配することなどありません。

6) マタイ 28:20

だから、論理的に考えてもそうだし、歴史を通して見る教育もそうだし、聖書の表現もそうなのですが、地の果てにまで、世界の終わりまで、どこにいてもいつでも主がともにおられる存在です。しかも天と地のすべての権利を持っていらっしゃるキリストが世の終わりまでいつもあなたがたとともにいるよ。主がいつもともにおられる、そういう存在です。

7) ローマ 8:28

だから、クリスチャンとして信者になった以上、最後に天国に迎え入れられるまでの人生の歩みにおいてさまざまなことが起こりますが、すべてのことを働かしてそれが益となる存在なのです。今までキリスト・イエスを信じてる自分がどんな存在なのか、それを聖書を通して確認したことが間違いなければ、この話はおかしな話ではありません。すべてのこと、良いこと、悪いこと、悲しいこと、嬉しいこと全部合わさって益となる、そういう存在です。なんと素晴らしいのでしょうか。何も問題ありません。心配しなくても結構です。そういう存在に造り変えられたということをまず改めないといけません。そうでないと、祈りが祈りとして正しく成り立たないのです。何かの問題があつて、何かの願い事があつて、一生懸命、宗教のように祈る信者がほとんどなのですが、今申し上げました信者の自分がどうなっているのかを改めていないので、その祈りは宗教になってしまいます。

2. 祈りの内容修正

だから、まず主の祈りを通してイエス様がおっしゃったように、祈りの内容を修正するために、あなたがたはバプテスマのヨハネとヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは違うんだよ、私はキリストなんだよ、ということ的前提にして主の祈りを教えていращやるのです。ぜひ祈る前に、キリストと出会って神の恵みによって救われて信者になった自分、今現在何か困っていることがあり、弱さのゆえに悩んでいるかもしれないけれども、そういうことと関係なくキリストのゆえに私はこの世に素晴らしい幸いな祝福の存在に造り変えられているんだと、これを大胆に宣言して感謝するようにならないと、クリスチャンとしての祈りは成り立ちません。これが本当であれば、これが間違いなければ、今までの祈りはいらないのではないのでしょうか。

1) 宗教、律法、ごりやく(自分中心)

宗教で見ていた祈りなどはもう私とは縁のないものになるはずなのです。それで祈りの内容が修正されます。今までは宗教的な祈りでした。自分が人間が頑張ればその分、報われるような、そういう感覚の祈り、また律法的な祈りでした。正しいかどうかずっとそういうことにこだわる祈り。そして、何よりも多いのが、何よりクリスチャンがなかなか抜け出せない祈りが、ごりやくの祈りなのです。この宗教の祈り、律法的な祈り、ごりやくを求める祈り、これは全部自己中心、自分中心から生まれるものなのです。なぜそのように自分中心に囚われるのでしょうか。それをすべて打ち砕いて勝利なさったキリストにある新しい自分と向き合って、それに豊かになっていないからサタンのやぐらが砕かれていないわけです。なので、祈りの内容、今まで当たり前だと思って願い祈っていた、まるでどこかでお辞儀をしながら一生懸命お祈りしていたような、そういう祈りはもはや私たちのものではないし、全部捨てなければいけません。それが主の祈りの教えなのです。自分本位の自分中心の自分のどうのこうのが祈りではありません。福音が何か分かっていないと、そのように祈るしかないのです。だから、教会に通っていても宗教になるしかありません。しかし、イエス様は主の祈りを通して教えていращやいます。あなたがたは神の子ども、

クリスチャンなのだよ。なので、今までのような祈り、他の宗教でやっている祈りなどは、あなたがたとは縁が切れているよ。あなたがたはこのように祈りなさいと教えました。

2) 神様の栄光を(救いの神様、三位一体の神様)

自分本位、自分中心の祈りではなくて、これから神様の栄光を求め祈りなさい。神様が主体なのです。祈りの主体が神様になります。主の御名があがめられますように。神様の栄光が現れるように。神様の栄光をほめたたえるように。その神の栄光とは何でしょうか。数えきれないほどの神の栄光でしょうけれども、祈るときに聖書を通して一番強調される神様の栄光は何かというと、神様は罪人の人間を滅ぼすことなく救われる不思議な愛、慈愛の憐みの神様なのです。これが神の栄光です。救いの神様をほめたたえて、救いの神様を代々にあがめられること。その救いの神様を私たちがほめたたえるときに、それは当たり前前に三位一体の神様をほめたたえることになります。父なる神様、子なるイエス様、聖霊なる神様でなければ罪人の私たちの救いは成り立ちません。だから救いの神様をほめたたえるというのは、今まで神々と言われていたものは偽物の神であって、私たち罪人の救いとは全く 1mm も関係ないということに気づくはずなのです。三位一体でなければ救いは成り立ちません。その救いの神様、だから唯一の神様、三位一体の神様をほめたたえることが祈りなのです。

3) 神様の願い(神の国)

そして、そのような神様の救いを感謝して、救いの神様をほめたたえていると願いが変わります。自分の願い、こうしたいということは消えてなくなり、神様の願いを願うようになります。御国が天で行われたように地でも行われるように。この地上が現場が人々がサタンに捕らわれて暗闇に支配されているということが見えてくるので、教育や愛情や福祉などが必要でしょうけれども、絶対に必要なのは神の国なのです。聖霊が臨まれまして、キリストの御名によって悪霊が追い出されて暗闇が砕かれること、それが個人にも必要なことであるし、家庭にも病にもこの国にも文化にも神の国が必要なのです。自分が金持ちになることとかではなくて。だから、祈りの内容が修正されます。神の栄光を求めると願いが変わり、神の願い、神の国を求めることになります。そして、このような祈りがすべての祈りなのです。その神の国を求めることの中に、私たちの内側に神の国が豊かになること。そして、暗闇に捕らわれている現場に神の国のことがなされることを願い祈るようになるでしょう。これがクリスチャンの祈りなのです。これは宗教と違う祈りです。

4) 欲と心配に流されないように(日々の糧を)

そして、この祈りが邪魔されないように日々の糧を与えてくださいというのは、今日食べ物をちょうだいという意味ではありません。世にあるものに対しての欲に走ることがないように。また世にあるもののゆえに心配に流されるようなことがないように。なぜなら神の子どもであり、神の国を求めていくのに、世にあるものや世にあるさまざまなことに引っかかって欲に走ったりするようなことがあれば、それとは相反することになります。だから、この神の国のために邪魔になるようなことに流されないように。それが日ごとの糧を与えてくださいという意味なのです。食べていくもの、それは神様が当たり前前に備えられるので、そういったことにテーマを移して右往左往、振り回されるような信者にならないようにという意味なのです。

5) 過ちと失敗に溺れないように(自他の弱さ)

それから、この神の国のために祈り、生きていくことに邪魔になるのは、このような心配と欲とプラス、人々との関係なのです。特に人の過ちや自分の弱さ、自分の失敗等々、それを合理化してはいけません。それに引っかかって溺れて、そこからなかなか抜け出せないままダメだ、ダメだと思う。それは良心的、正直な人間のように思われるかもしれませんが、見事に悪魔に騙されることなのです。だから悪からお救いくださいという祈りを最後に付け加えるようになるわけです。つまり、どのような過ちがあっても、どのような失敗があってもそれに溺れないように。なぜなら神の国のことを求めて進めていかないといけないから。自分のこともそうだし、他人のこともそうだし、自他の弱さに対してつまづくことがないように。今までの基準から見たときにはありえない、それは間違いだ、我慢できない、放っておけないといういろいろなことがあるかもしれません。でも、あなたがたはクリスチャンなのだよ。神の栄光をほめたたえ

て、自分が救われたことを忘れないで。神の国という目的、願いがもうはっきりと固まっているので、それが祈りなので、それを基準にして邪魔にならないように。妨害にならないように。いくら弱さがあっても他人のどんな間違いがあっても、それがあなたが神の国を求めて祈ることに邪魔になるようなことになってはいけません。そういう教えなのです。だから、一言で申し上げると、クリスチャンの祈りの内容は、救いの神をほめたたえて神の願いを祈ることがすべてなのです。今日からぜひ皆さんの祈りが修正されることを祈りたいと思います。

3. 答えを信じる信仰の祈り

そして、それを祈るとき、イエス様は主の祈りの次におっしゃいました。どのように祈るべきなのかと言いますと、内容をまず正して、それからはこの神様が望まれるクリスチャンとしての正しい内容で祈るときには、必ず答えられるということを信じて祈らないといけません。それがその後のイエス様の教え、お話です。

1) 頼み続けるなら、なおのこと天の父が

特に友だちの家に真夜中に行って、こういう事情があるのでちょっとパンをちょうだいと言った時に、誰がそれに応じるのか。それは普通なのです。頼み続けるということ、とにかく強引にずっと頼めば仕方がなく... と誤解して解釈する人が多いのですが、そういう意味なくて、友だちだからということでは動かないかもしれませんが、その友だちの家に今、私に必要なパンがあることを知っているわけです。なので頼み続けるという意味は、神様には必ず答えがあるし、神様にのみ答えがあるので、それを忘れないことです。ずっとそこに集中するということです。言葉を変えますと、頼み続けるというのは目をそらさない、違うところを見ないということです。なぜでしょうか。必ず答えられるから。神様の方に答えがあると分かっているから。それから、子どもが魚をちょうだいと言うのに蛇をくれるような親がいるか。卵をちょうだいと言っているのにサソリをくれるような親がいるか。あなたがたは悪い者でも子どもにはそういうことをしないのではないのか。ましてや天の父が、つまり罪人の悪魔の奴隷であり、地獄の運前を抱えて神を裏切っている滅びて当然なあなたがたを愛して、ひとり子イエス・キリストを十字架の犠牲にして救い出されたその神様。それで自分の子どもにされました。その父なる神様がなおさら。良いものを与えることがないのでしょうか。つまり、必ず答えられるはずではないのか。しかも良いもので。このようにイエス様がおっしゃっているのです。なので、信者が祈る時には、まず祈りの内容を修正しないと いけません。内容が神様のみこころに合う内容であれば、必ず答えられることを信じて、諦めることなく期待をもって祈り続けることです。聖書にはそのような約束はいくらでもたくさんあります。なので、聖書の箇所を確認しましょう。

2) ヨハネ 14:13、16:23-24、マルコ 11:24、ヤコブ 5:15

ヨハネ 14:13「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです」と。何でもしようかと約束されました。ヨハネ 16:23-24にも「その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしの名によって父に求めるものは何でも、父はあなたがたに与えてくださいます」。そういう約束なのです。マルコ 11:24にも「ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい」。なぜなら必ず答えられるから。ヤコブ 5:15にも「信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がらせてくださいます」。信仰による祈りは病人を癒しますというのは、何を信じる信仰でしょうか。神様は必ず答えられることを信じる信仰です。

3) 通りの答え、より良いものを、無答え

なので、このような信仰を持って神のみこころにかなった祈りをささげると、神様は祈った通りに答えられる場合があるし、私が祈ったことより、より良いものをもって答えられる場合もあるし、また私の祈りがふさわしくない間違っている祈りであれば、答えられないことで答えられる場合もあります。必ず神様は信者の祈りを聞いていらっしゃるし、必ず答えられるのだと。このような信仰を持って祈るときには、期待を膨らませて祈らないといけません。答えられるから。それがいつになるかはわかりませんが、祈っていて心の中に感謝が生まれること自体がもう答えなのですが。それで祈りによって時間が経ってから癒

される場合もありますが、このような祈りの中で自分も気づかぬうちに古い刻印が砕かれて、聖霊の働きによってみことばが刻印されて、いやしの祝福を自分で味わうことにもなるわけです。私たちは神様の恵みによって、キリストが私たちの代わりに死なれることで買いとられた尊い神の子どもであることを忘れてはいけません。なのに願いも祈りも考えも評価もすべて宗教と何も変わらないまま、ずっと教会生活が流れて続いているということを悔しい思いで振り返って、そこを断ち切るきっかけにしましょう。神様は私たちを通して、私たちの教会を通して、地域と 47 都道府県、一千大学、237、5000 未伝道種族の前に証人として立たせる計画をもって私たちを召されたので。私たちがそのような契約を信じて、祈りの内容を修正して、修正というのは強要ではありません。それ自体が自分がどれほど幸せで、どれほど祝福された幸いな者なのかを認めることなのです。何を食べるか飲むかはもうこれ以上、祈らなくてもいい幸いな天にある霊的すべての祝福をいただいている者なんだ。まず自分のアイデンティティ、自分自身を変えていかないといけません。自分の意識の中で、考えの中で。小さい時、親に何かをされた。友だちにいじめられた。貧乏だった。頭が悪いよ。無視された。さまざまなことによって蓄積されて、それが脳に入り込んで、私はこういう人間だと思い込んで自我を形成し、自分の殻を破ることができないまま閉じ込められて、聖書のお話も聞き入れることができない、周りのお話も聞き入れることができない。いつまで経っても自分の考えにずっと縛られて…。キリストはそのような私たちのために死なれました。すべてを完了しました。それで私たちが救われたわけです。なんと感謝でしょうか。祈る前にキリストが私のために十字架で死なれて新しく造り変えられた自分と向き合いましょう。ぜひ神のみことばを聞く耳を開いてください。自分の考えに囚われていないで。何もかもいつも自分の考えがすべてなのです。それは病気です。悪魔のしわざです。神のみことばが聞けないように。牧師のお話が聞こえないように。いくらしゃべっていても私は私ですよ。悪魔のしわざです。いやしは期待できません。要塞をも破る聖霊の力が働いて、高ぶっているもの、すべての理論、特に考えをキリストに服従させるような働きを祈ります。

まとめましょうか。クリスチャンの私たちが祈る前に、イエス様を信じている自分が誰なのか、未信者とは何が違うのかを深く黙想しましょう。いつまでどこまで黙想すればいいのか。条件、環境と関係なく感謝が溢れて喜ぶようになり、ああ自分は幸せなんだ。幸せな者なんだと確認できるまで、宣言できるまで黙想しましょう。いろいろな忙しいこと、心配事あるでしょうけれども、ここが確認できるまではそれに対して考えるすべては 100%間違いになりますので。そして、それが確認できたら願いが変わります。神の願い、神の国に祈りのフォーカスを合わせましょう。そのために神様が約束されました。あなたがたは知らなくていいよ。聖霊が臨まれると約束されたので。その神の国という願い、課題を持って、使徒 1:7-8 の約束を握りましょう。時間を定めてそれを祈るわけです。そして、その祈りの時間の他に、誰かとの出会い、何かの仕事、何かの出来事があるのが私たちの生活なのです。そこで今までのように自分の考えに流されないで、自分の感情に流されないで、神の国を軸にして神の計画は何かを問う祈りをしましょう。それが祈りです。そうすると、必ず皆さん自分自身が神の国を先に体験し、いわば神様の 25、自分の能力、自分の限界を遥かに超えて神がなさる 25 を体験するようになります。そうすると人生ががらりと変わり、聖霊に導かれて証人としての道しるべを着々と歩いていくようになるので、その祝福を放ったらかしにしないで自分のものにし、ぜひぜひ勝利の信者になりましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。私たちは弟子たちのように宗教のイメージを持ってごりやくのイメージを持って祈りを教えてくださいと願うときがありますが、今日の主の祈りを通して本当に悔い改めて、まずキリストによって新しく造り変えられた幸いな自分と向き合うことができるように、それが感謝と喜びに変わるまで黙想して、今までの祈りのすべて捨てて、神の国とその義を求める祈り、そして必ず答えられることを信じて、聖霊の約束を握って祈ることができるように、祈りのクリスチャンとして私たちを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。